島根県立図書館報

# 圖書館たより

号数　第34号
発行日　昭和51年12月25日
編集
発行　島根県立図書館
松江市内中原町52
ＴＥＬ(0852)22－5725
印刷　㈲高浜印刷所

題字：和漢古典から

（地方出版物あれこれ）

## 地方文化と出版活動

地方文化とはなにかというとき、これを簡潔に定義することは容易でない。ただ、中央文化のおこぼれを頂戴して、それと同化する方向が、地方文化の発展でないことだけは確かである。たとえば、中央の情報文化が、マスメディアによって同時に地方に伝達されても、それが直ちに地方文化の向上にはならないだろう。単に中央文化を一方的におしつけられているだけのことなのだ。地方文化とは、その基底に、地方の風土や歴史的伝統をふまえたものでなければならぬ。だから地方文化は、中央文化とかかわりがないか、或いは対立的側面すらもっているといえよう。

地方文化発展のバロメーターは、地方出版の状況である。地方出版が成立するためには、文化創造にたずさわる人（著者）と、それを支える読者層の拡大がなければならない。ところで、島根県立図書館郷土資料室の調査によると、昭和51年１月から11月までに刊行された地方出版物は、約70点の多きに達している。このうち約半数は、市町村史（誌）のような自治体の出版物だが、他方、地方出版社、任意出版団体、個人の出版物も増加していることは注目してよい。それらはほとんど郷土の歴史や民俗に関するものであり、日ごろコツコツ研究した成果が発表されている。だがこういった出版物が次々と刊行されるのは、営業的に成り立っているからであり、その背景には出版を支える読者層の広がりがあるからである。読者層の拡大現象は、地域住民の郷土への関心のたかまりにほかならないが、こういった郷土に関心をもつ人々こそ、実は地方文化の推進者なのである。

島根県下の出版活動が最近ますます伸びているのは、とりもなおさず島根の地方文化に、明るい展望をもたらすものである。

島根県立図書館奉仕課長　**藤　岡　大　拙**

# 県下にひろがる「古文書を読む会」(二)

## 島根町・隠岐の巻

### 島根町の巻

**動機**　島根町では、49年1月町誌編さん事業が発足し、同時に資料の収集がはじまった。収集資料の中には、当然古文書も含まれ、編さん室には次々に古文書が運びこまれてきた。そこで、これらの古文書を整理、利用するには、ともかくも先ず読めなくては……と、図書館へ桜木先生の派遣をお願いした。

**発足**　こうして、町の古文書をテキストとして毎月一回、2時間の学習が、町誌関係者を含め会員44人で、49年5月からはじまった。

第一回は、役場の会議室で、展示会とあわせ開催した。集まった古文書の中から、百点余りを選んで展示公開し、一般町民の参観もあり相当な人気だった。その日のテキストは、享和3年(1803)加州本吉の船が加賀の後田島で難船した記録だった。

(第一期修了式　教育長から修了証書を受ける高井テイ子会員　50.10.30)

なじみ深い地元の地名や、屋号に残っている船問屋名などが出てくるし、難船の状況がナマナマシク手にとるように書かれていて、読み進むうちに32人の受講者の中から熱気が立ちこめてきた。町の広報誌に、「この目に耳に祖先の語りかけが……」と紹介された。こうして第一回は大成功に終わった。

**歩み**　50年度は、町誌編さんのための読む会から、社会教育の高齢者教室として、会員36人ではじまった。9月には、15回30時間となったのを機会に、第一期の終了式を行った。教育委員会から、6割以上の出席者に終了証書と記念品を、それ以下には奨励の意味で賞状と記念品を贈った。

11月には、加藤義成先生を講師に開催した「郷土の歴史を語る会」で、高井テイ子会員が、「古文書を読む会を受講して」と題して感想発表を行った。また、このころから、会員の要望でテキストの事前配布を始め、予習により学習効果が大いに高まった。

野波地区では、孫会が10人の会員ではじめられた。51年1月には、会員の要望で、桜木先生を囲む懇親会を催し、大いに気勢をあげた。こうして、この10月で28回を迎えるに至った。

**会員**　会員は、発足当初の55人が次第に減り、現在は女性3人を含め36人、ほとんど老人会の方々である。その中で特異な存在は、大芦の北野文明さん、ウグイス子飼いの名人で、島根・鳥取の鳴きあわせ鑑賞会の常連、読む会にもただの一度も欠席せず、常にまっさきに挙手して朗々と読み上げる若さもある。予習も徹底し、「闘」の字を「カブル」と読んで一同をアッと言わせたこともある。

**テキスト**　悩みはテキストの作成である。原本をゼロックスにとり、ファックスにかけ、謄写板でする。手間はとにかくきれいなテキストができぬのが心苦しい。原本の選定は桜木先生にしていただくが、難易とりまぜ、内容に変化をもたせるのにはご苦心があろう。11月は、「奉公人受状之事」などの一枚物、「船問屋株に関するもつれ」などである。

**利用**　もともと町誌に利用するため解読できるように……という、いわば実利的な目的ではじめた読む会が、今では高齢者教室の一般教養講座として、ずっしりと定着した。

一方、埋もれている古文書を、郷土の文化財として、私蔵することなく町へ提供しようという気運も次第に高まってきた。きょうも、先日運びこまれた古文書の山から、一枚ずつとり出して整理袋に納めながら、「これはテキストに使えそうだぞ」などと、つい独りごとをもらすようになった私である。

近い将来、島根町誌「古文書編」の刊行が予想され、町民から提供された古文書の数々が公開されることになるが、わが「島根町古文書を読む会」の会員の皆さんが、その解読筆写に大きな力を発揮されるよう、大いに期待している。

(町教育委員会主事　寺　本　二　郎)

# 隠　岐　の　巻

隠岐には、郷土史家が多い。当然、古文書を研究する必要がある。しかし、これらの方々は、個個に活躍しておられるため、隠岐島後教育委員会では、後継者育成等の必要もあり、広く一般に呼びかけて同好の参集をもとめるよう、昭和48年に県立図書館に依頼した。

古文書解読講習会は、隠岐島後教育委員会と、隠岐文化の会との共催で48年７月18日に開かれた。講師は、県立図書館藤岡大拙奉仕課長で、まず最初に古文書の一般的知識について、約40分間説明がありその後、テキスト（捨子教誡の謡）の講義があった。

会場は西郷町公民館二階大会議室で開催され、参加者は約50名で、一般人・学校教職員・隠岐文化の会会員諸士であった。

（古文書講座風景）

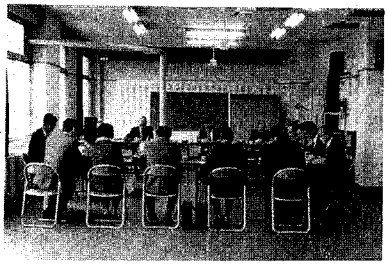
この講習会により、（古文書を読む会）を結成しようと言う動きが強くなり、毎月１回づつ開催する運びとなった。期日は特に決めて居らず、その月々都合の良い日に行なっている。なお、会は大体午前10時頃から午後３時頃までである。

初期には、テキストは県立図書館で使用されているものを、数部解答文と共に送ってもらい、それをオートファックスで焼き、会員の部数だけガリ刷りする。

講師は特に決めないで、お互いに読み合っていく方式をとっている。解答文は、会のあとで全員に配布する。

その後、郷土の文書を読み、合わせて郷土の歴史を研究しようではないかと言う声が強くなり、現在は、島後の近世文書を使用している。今までに多くテキスト化されたものは、県指定釜の民家にある、西郷町指定佐々木庄屋文書（ 257点）である。これは、慶長12年の隠岐国嶋後内釜村御検地帳にはじまり、新田改帳、隠州視聴合紀、御立見帳、御年貢米雑穀銀皆済目録、検見引畝帳、差出シ帳、惣百姓連判御請書、田畑高改帳、牧畑田方御取箇者上納覚書、免相御下札併御成箇割付覚、萬上納代銀取立覚書、奉願往来手形併宗門証状等がある。また、流人の島でもあった関係で、彼等の所業の事、飢饉の時の食物喰延しの方法などもテキストとして採用した。これ以外では、承久の変（1221）に敗れ、在島19年でなくなられた御鳥羽上皇の隠岐院遠島百首、億岐国造家（玉若酢命神社）文書のうち、40代当主億岐幸生（敍従五位下）が、京都へ勉学に出島した時の手紙、明治維新に活躍した中沼了三（正五位）の手紙、五箇村一宮の大西文書等である。

今後、利用すると考えられる資料は、今まであげたものは勿論、その他、隠岐騒動で活躍した加茂の井上文書、水若酢神社宮司家忌部文書、東町松浦文書、隠岐国府尾城主関係の下西村上文書などがある。まだ、各地に埋もれた文書も多数あると考えられるので、これらを発見して使用したい。島前地区にも多くの文書があるので活用したい。なお、テキストの解答文は、長老の方々にお願いしている。



会員は、最初は少なかったが次第に増加の傾向を示しながらも増減をくり返し、現在、男子37名、女子４名、合計41名である。年間会費は千円で、メンバーは、文化財専門委員・学校教員退職者・一般人・現職教員・公務員・家庭婦人・青年等である。現在、土日を外しているので参加者は常でない。今年の10月17日の出席者は14名であった。しかし、テキストおよび解答文は、会員全員に配布する。事務局は教育委員会にあり、会場は常に西郷町公民館を利用している。布施村の場合は、会員が10名いるが、代表者１名が出席し、テキストを持ち帰り、月に２回同村で講習会を行なう。他村でもそういう傾向に向かう可能性もある。また、現在の会員の中でも、レベルが大きく相異するので、上級・初級の２講座に別ける必要性も考えられる。

（島後教育委員会嘱託　村　上　　健）

# この一年間の地方出版物

ここに収載したのは、本年１月から11月末までの県立図書館で入手し得た出版物である。ただ、紙面の都合上、復刻もの、小学校百年史のたぐい、さらに詩文関係のものを割愛した。はなはだ残念ではあったが、他の機会に紹介されると思われるもの、すでに紹介あるいは宣伝されたものもあるし、またその道の人たちの間では、周知のものと判断されケースを除いたのである。ご諒承いただきたい。詳しい解説はつけなかったが、まとめて速報の意味を少しでも果したいとねがっている。

| 分類 | 書名 | 編著者 | 発刊 |
|---|---|---|---|
| 歴史 | 続邑智郡誌 | 続邑智郡誌編集委員会編 | 同委員会刊 |
| | 佐田町史 | 佐田町教育委員会編 | 同委員会刊 |
| | 津和野町史　第２巻 | 沖本常吉編 | 津和野町史刊行会刊 |
| | 日原町史　近代　上巻 | 大庭良美編 | 日原町教育委員会刊 |
| | 西郷町誌　下巻 | 西郷町誌編纂委員会編 | 西郷町役場刊 |
| | 鹿島町史料 | 勝田勝年編 | 鹿島町役場刊 |
| | 瑞穂町誌　第３集 | 瑞穂町文化財専門委員編 | 瑞穂町教育委員会刊 |
| | 郷土斐川物語－岡義重遺稿－ | 古川治男編 | 斐川町有線放送電話局刊 |
| | 戦国郷土史談 | 足立源次郎著 | 足立源次郎刊 |
| | (事件を追って)戦後30年島根の軌跡 | 西尾忠良編 | 松江写真植字社出版部刊 |
| | 南北朝石見軍記 | 山田木母著 | 石見歴史保存会 |
| | 石東地方史資料11～13集 | 小林俊二編著 | 小林俊二刊 |
| | 黒松郷土資料１～10集 | 森脇太一編 | 森脇太一刊 |
| | 黒松文書目録 | 江津市誌編纂委員会編 | 同委員会刊 |
| | 津和野ものがたり　第７集 | 上納紙制度と義民仁右衛門悲話 | 津和野歴史シリーズ刊行会編刊 |
| | 隠岐－隠岐国新風土記－ | 速水保孝著 | 山陰郷土文化研究会刊 |
| | (黒松郷土資料)黒松の歴史 | 森脇太一編刊 | |
| | (五万分之一地形図による)島根県の地名 | 森脇太一編刊 | |
| | (五万分之一地形図による山・川・島等の)島根県の地名 | 森脇太一編刊 | |
| | (五万分之一地形図による語尾の五十音順) 島根県の地名 | 森脇太一編刊 | |
| | (地名鑑による) 島根県の地名 | 森脇太一編刊 | |
| | 芋代官頌徳碑調査及び実測 | 黒河邦之著 | 黒河邦之刊 |
| | 詩文に表れた月山と幸盛 | 妹尾豊三郎編 | 広瀬観光協会刊 |
| | (明治天皇侍講) 中沼了三伝 | 中沼郁著 | 中沼了三先生顕彰会刊 |
| | 西田千太郎日記 | | 島根郷土資料刊行会刊 |
| | 松江城 | 錦織好孝編 | 松江観光協会刊 |
| 社会科学 | 松江の民俗芸能 | | 松江市教育委員会社会教育課刊 |
| | それぽっちり物語－石見銀山昔話伝説集－ | 大崎雪枝著 | 大崎雪枝刊 |
| | 島根県美濃郡匹見町昔話集 | 島根大学昔話研究会編 | 同研究会刊 |
| | 水まさ雲 | 大庭良美著 | 石見郷土研究懇話会刊 |
| 自然科学 | 山陰のくらしと気象の暦　昭和52年度版 | 日本気象協会松江支部編 | 同支部刊 |
| | 島根県歯科医師会史 | 島根県歯科医師会史編纂特別委員会編 | 島根県歯科医師会刊 |
| 工学 | 出雲杜氏組合誌 | 出雲杜氏組合誌編集委員会編 | 出雲杜氏組合刊 |
| 文学 | 石見神楽 | 吾郷哲夫・朝倉久善編 | 神理研究会刊 |

# 読　書　会　紹　介 No.1

| | |
|---|---|
| 読書会名 | われら読書会 |
| 所在地 | 松江市灘町．松江市青年センター |
| 代表者 住所 | 松江市東津田町 |
| 代表者 氏名 | 福間純子 |
| 会員数 | 17名 |
| 定例日・時 | 毎月第1･3水曜日 18：30～20：30 |

われら読書会、発足して3年。テレビに、遊びに誘惑されつづけている者たちが〝少しは本を読まなくちゃ〟と始めたものでした。だから、読書家には程遠い若者が中心。「マンガも忘れられない、郷土の本位読まなくては…」といった調子です。

読書会も、松江市青年センターでグループ活動をしている仲間の横の結束。メンバーの大半が働きながら…というもの。夜の読書会ですが、その明るく楽しい笑顔と熱っぽい男と女の大論争？は、皆んなが十分楽しめる内容です。

さて、その方法です。会合は、第1と第3の水曜日の夜。決められた本を、自分の時間で読んで集まり、自分自分で言いたい放題。小説のときは、主人公に同調する人と反対する人と、大激論。読書は、孤独な作業です。ひとりよがりもいいが、話し合ってみて発見する別の読書味もあるものです。

第1回は『ユダ人と日本人』最近は、女性軍は赤面して買ったと言う、つげ義春画の『紅い花』という劇画。いろんな本を読書会ごとに決めます。本もちゃっかりと県立図書館から借りるなど。会員は手紙代金とコーヒー代。「読書会ニュース」を時々、リコピー印刷で発行。山陰中央新報のグループ便りに会のお知らせをしたり、たまには、皆んなで倉敷へピクニック。などなど。

読書会の方法は、とにもかくにも適当なもの。言いたい放題から始めています。どんなグループでも大切なのは①リーダーの活躍②言いたい放題（自由に発言）③内と外への呼びかけ…といったこと。

まず、読書会の持っている固一いイメージを取り去って「誰れでも、必ず自分のものを本の中に発見できるし、収穫できる」ということを生かした活動を心がけたいもの。

さあ、あなたも、やってみませんか？

| | |
|---|---|
| 読書会名 | バクの会 |
| 所在地 | 江津市郷田．江津市立図書館 |
| 代表者 住所 | 江津市都野津町 |
| 代表者 氏名 | 網　和幸 |
| 会員数 | 11名 |
| 定例日・時 | 毎月第3水曜日　18：00～20：00 |

私たちのバクの会は、悪夢を食べる中国の想像上の動物から名をとったもので、身近かな生活の問題に取り組み、読書を通して集団の中で語り合い、人間性の向上を目ざす目的で一年前に発足したものです。年令、性別、職業も異なった若者の集まりです。毎月、日を決めて会員が集まり、当番の会員が自分に割り当てられた課題、あるいは自分の選択した本の中にあることを紹介し批評をしあいます。

最初は、会員の不慣れや遠慮もあるので、気軽に継続することを考え、二、三ヶ月は本を使用しないで身近かな問題に取り組みました。例えば、「マスコミが我々に与える影響」というテーマの時などつねに身近に存在し、見過ごしがちな事項として、〝テレビ番組の貧困〟〝新聞の特殊性〟〝家族の会話〟〝マスコミをいかに選択すべきか〟などの問題提起がありました。どの意見も面白かったが、特に文弱の私には、新聞のことについては得るところが多かった。その後は県立図書館の読書会用テキストを借用したり、会費の中から購入してきました。先日漱石の作品を扱った時に、興味深い意見が出ました。それは、作中の女性のこと、「健康かつ知的、個性を持ち、独立した思想を抱いて、生き生きとした魅力を持っている。ところが、作中で表現しているような、知性に富み、理知的で、教養のある紳士をも手玉にとるような女性というものは、その頃にはいなかったのではなかろうか、つまり漱石自身未来を見通しての女性像というものを創作していたのではなかろうか。」というような意見内容もありました。

今度は、長い作品や、難しいもの、一人で読みきれないものを皆で寄りあって輪読する計画を持っています。そして会の名称通り、人間性の回復をめざすべくもっと若者の輪を広げていこうと語っています。

# 新　刊　図　書　紹　介

## 「島根県の歴史散歩」

山陰歴史研究会　山川出版社　480円

出雲の自然は穏やかに息ずき、石見は雄々しく厳しい。そして隠岐は紺碧の海に浮かぶ。この異った自然、風土、文化が融合しつつ一つの県を作りあげた。

「島根県の歴史散歩」は五人の筆者の地域に根ざした、暖かいまなざしで出来た本である。各地の郷土史を堀りおこし、文化財をひろいあげ、克明に一歩一歩積みあげて書かれている。これまでに県下各地の文物と歴史とを併合し、詳細に記述したものはなかった。その点この書の意義は大きい。高校生の副教材に耐えるものと認められるのはここに起因する。もちろん、老若男女を楽しませ、旅へ誘うことはうけあいである。ポケットタイプの小冊子で安価なのも旅行客には嬉しい。県民も目を通し細長く土地の続く島根県を今一度見直してほしいと思う。

## 「新釈遠野物語」

井上ひさし著　筑摩書房　880円

柳田国男の有名な作品に「遠野物語」というのがある。現在の岩手県遠野市にあたる地方で言い伝えられた昔話を、氏が土地の人から聞きまとめたものであるが、それにヒントを得つつ、著者井上ひさし氏が民話風の創作として書きあげたのがこの本である。

昭和28年頃、釜石市に住む「私」が、遠野近くに住んで犬伏太吉という老人をときどき訪れて聞いた話を、書きつづるという形になっている。

病気で寝ている母親に人間の肝を食べさせようと、水泳中の子供の尻穴から腸と肝臓を引き抜く河童の話「川上の家」。

馬車曳の美しい一人娘とその飼馬とが、南部の雪原にくりひろげる優しくも不思議な情事と恐ろしい結末を描いた「冷し馬」等、幻想的でエロチックな作品九篇を収録。

## 「わ が 街 角」　全10巻・既刊５巻

早乙女勝元著　新潮社　各 800円

勝平は気弱で、虚弱な子である。貧しくとも強く生きよ、という母の願いもむなしく、学校に通う彼の足はおどおどして重い。勉強も嫌いだが、強制と暴力の支配する学校は地獄でしかない。死ぬことが正義だなんて、恐ろしくてどうしても考えることができない。

しかし、下町の路地裏で、勝平とその家族、向こう三軒両隣りの人たちのおりなす生活は、どんなにつらく貧しくとも、明るく、優しく暖かい。この暖かさに包まれて、彼はつまずきながらも何とか生きてゆく。

下町作家早乙女勝元が、「反戦平和」「子らに優しさと勇気を」との願いをこめて書く自伝的大河小説。３月10日の東京大空襲、見慣れた街角が焼土と化し、10万人の焼死体が散乱した廃墟に立つ勝平少年に、どんな戦後青春篇が待っているだろうか。

## 「ノアの箱舟殺人事件」

池田得太郎著　光文社　580円

ドウバヤジトというトルコの東はずれの町に、高校教師、磯村久雄はやってきた。アララト山をこの目でみたいと思ったからである。海抜 5,165メートル、ソビエトと、イラン、トルコにまたがるこの山は、旧約聖書の創世紀の中にある、ノアが大洪水を逃れて漂着したという、伝説の山である。

だが、美しい山も、様々な遊牧民を相手に殺伐とした抗争が続き、白いトーチカからは砲列がのぞき、戦車が砂塵を上げて走っている。彼は、町で日系米人のカメラマン、ライアン、ハントを助け、知合う。しかし、ガイドのタススムの見せた〝ナゾの石〟を探しに行き、死体となって発見される。その彼の肩中にケロイドを見出し驚く。実は彼自身被爆者であり、行方不明になった弟ではないかと、身元を調べ始める。そうした彼の前に続々と事件がくり広げられていく。中東の雄大な自然を背景に、エキゾチックなムードを漂わせながら展開される新人推理作家の作品である。

# 私　と　こ　の　作　家

## 「私と室生犀星」

八束郡東出雲町下意東
永　島　淑　美

夏の賑わいにはまだ遠い閑散とした若葉の軽井沢で、室生犀星の碑は静かに私をむかえてくれた。あれから、10年ちかい歳月が、苦しく孤独だった青春とともに流れ去っていった。

人との出合いにも、しばしば良き仲介者があるように、私が室生犀星を知ったのは、良き堀辰雄という仲介者があったから。堀氏が洋館の建物であれば、室生氏は簡素な日本建造物である。堀辰雄には無い野性的でかつ繊細な男性を見る思いがした。

私には驚きであった。自分をこのように出しきれるということ。無垢の美しさと純粋さと、そして、命そのものの姿。

私が読んだ、詩、小説、随筆は、氏の作品の中でのごく僅かなものであるが、何時でも感じるのは、詩を通しての氏であり、詩人としての室生犀星である。人間の本質、魂からの新鮮な叫びが聞こえる。人間が生きる上で身に着けた諸々のもの、それを一つ一つ剝ぎ取った真の自分自身、魂そのものの輝きであろうか。それは、読む者の魂へと響き動かす。

室生氏の作品には、深い人間に対する愛を根底に感ずる。「吾が愛する詩人の伝記」は、なんの飾りも、衒いもなく、真実の眼で見た詩人たちが生き生きと描かれている。同じ詩人としての慎しみと、早く去っていってしまった同僚に対する愛が。駄目なものは駄目なままで、詩人のもてるものが、そのままの姿で引き出されている。それが、すべての詩人を詩人たらしめているのであろうか。

この作品によって、いつも彼らの作品を読んでいる時とは違った、もう一歩踏みこむ道を与えられた。

愛には、色々な表現と有り方があろうが、犀星の愛は、深い哀しみを知り尽した上で、遙か遠くから、全てを許容してしまう父親の愛を感じる。氏は、家族を愛し、飢えさす事は生涯なかった。一番身近な者に思いやりを持つことの出来る精神、これが彼のすべてを語っているように思う。若き日、満されることの無かった母親の愛、愛のあたたかさに対する激しい憧憬が、「かげろふ日記遺文」になって表われたのだろうか。女性とは、氏にとって永遠であったのだろう。

室生犀星

室生犀星は、私に毎日の、もの事のとらえ方を、考え方を提示してくれた。始めて氏にふれた時から、事あるごとに、あの時の犀星は、こう言いたかったのではなかろうかと思う毎日である。何時の世にあろうと、無垢な真実な目で見ることの爽やかさがうれしい。

会ったことも、話した事もない氏に、非常な安らぎをおぼえ、こうしている今でも後を振り向けば、朴訥とした優しい眼差しをたたえ、無言で、氏が立っていそうな気がする。

---

## あとがき

一般のみなさんを対象に「私と読書」「私とこの作品」「私とこの作者」について論文を募集しましたところ、多数のご応募をいただき、厚くお礼を申し上げます。優劣をつけがたいほど、立派な作品が多く、そのうち一編を掲載させていただきました。

# 視聴覚係より　新しいフィルムの紹介

## 図　書　館

文部省指定製作教材映画
カラー30分

明るく、気軽に利用できる建物、自由に図書を選べる開架式書架、簡単な貸出し手続き、広範なレファレンス活動、そして地域をカバーする分館網や自動車文庫のサービスなど、いま日本のあちこちにつくられている新しい図書館は、従来の図書館という言葉から連想されるイメージとは、まったく異なった働きをしている。

しかし、このような最近の図書館の実情を知っている人はまだまだ少なく、地域の住民がじゅうぶんに活用しているとはいえない。

この映画は、さまざまな地域にある図書館の優れた設備や行届いたサービスなどの実態を紹介し、「誰れでも、いつでも、どこでも」という新しい図書館の理念がどのような形で実現されているかを描こうとするものである。また市町村立図書館と、都道府県立図書館とのそれぞれの役割分担などのサービスシステムも明らかにしている。

そして、図書館がこれからの地域住民の文化センターとしての機能を果たし、生涯教育の施設として活用できることを理解させ、より多くの人々、特に社会人が図書館をもっと身近かなものと考え、気軽に利用することをうながし、さらに、そのような図書館の実現に向って、人々の意識を高めていくことを目的として文部省が企画したものである。

## ママ、目をみつめて

文部省選定
厚生省推選
カラー28分

私達はまるで空気を呼吸するようにことさら意識しなおすこともなく（言葉を話し、書き、聴き、読んで生きている。それは幼児期のうちに両親や家族、そして周囲の人たちが話す言葉を耳から聴き覚え、まねていく段階から始まる。ところが不幸にもその聴力になんらかの障害をもって生れた子供たちにとっては、正常児のように音や言葉を聴きわけ、覚えることが出来ない、うまく話せないということがおこってくる。

もし生れた子供の耳がきこえない……ということがわかったとき、その両親の気は縛倒し、その子の将来を思えば身も細る思いで日々を住ごすことになるだろう。ハンデをもって社会にとけこみ生活していけるだろうか、幸せな家庭生活が営なめるだろうかと心を痛めながらもいつかはその悲しみから立ち上って親と子が目をみつめあい、心と心のふれあいをささえに苦難に向って前進するだろう。

この映画は、そういう悩める両親に指針を与え、勇気と希望を持たせ、障害者自身には前途に光明をかかげるものであり、又、一般の人々には障害者に対する正しい認識と理解を深める契機となり、聴覚障害児教育の実態を示すことによって、一層の理解と協力を求め親と子、家族と社会の問題も考えざるをえない映画となっている。

内容は耳に障害のある子供達が、0才からの適切な指導を受け、正常児に劣らぬ言葉の発達をとげていく段階や、障害を乗り越えてさまざまな職場で活躍している姿、赤ちゃんを中心にして毎日幸福な家庭生活をおくっているようすなど数々の実例を示して紹介している。

障害者をもつ母親の、正常児に負けることなく運動会を楽しむ子供を見守りながら苦闘の歴史を語る言葉が、すべてを証明するかのように、障害児をもつ親にとって明るい前渡を語りかけ、話しかけてくれるだろう。